

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

大山エンリコイサム 美術家

Enrico Isamu Oyama / Artist



CREATOR INTERVIEW

No

147

大山エンリコイサム Enrico Isamu Oyama

美術家。ストリートアートのひとつであるエアロゾル・ライティングのヴィジュアルを再解釈したモチーフ「クイックターン・ストラクチャー」を起点にメディアを横断する表現を展開。イタリア人の父と日本人の母のもと、1983年に東京で生まれ、同地に育つ。2007年に慶應義塾大学卒業、2009年に東京藝術大学大学院修了。2011-12年にアジア・カルチュラル・カウンシルの招聘でニューヨークに滞在以降、ブルックリンにスタジオを構えて制作。これまでに大和日英基金（ロンドン）、マリアンナ・キストラー・ビーチ美術館（カンザス）、ポーラ美術館（箱根）、中村キース・ヘリング美術館（山梨）、タワー49ギャラリー（ニューヨーク）、神奈川県民ホールギャラリー、慶應義塾ミュージアム・コモンズ（東京）などで個展を開催。『アゲインスト・リテラシー』（LIXIL出版）、『ストリートアートの素顔』（青土社）、『ストリートの美術』（講談社）、『エアロゾルの意味論』（青土社）などの著作を刊行。『美術手帖』2017年6月号を企画・監修したほか、コム デ ギャルソン、シュウ ウエムラ、JINS、アウディなどの企業やブランドとコラボレーションを実施。大相撲令和4年1月場所では、横綱照ノ富士の「三つ揃え化粧廻し」にアートワークを提供し、話題となった。2023年3月に東京・天王洲で開催されたアートフェア「MEET YOUR ART FAIR 2023「RE:FACTORY」」ではアーティストック・ディレクターを務め、多角的に仕事をする。2020年には東京にもスタジオを開設し、現在は二都市で制作を行なう。

<http://www.enricoisamuoyama.net>

No

147

大山エンリコイサム 美術家

ENRICO ISAMU OYAMA / Artist

対話を重ねて横断することが、世界をひらく。



クリエイターインタビュー

『都市の無機質なコンクリートから、横断する』

published_2023.05.10 / photo_tada / text_ikuko hyodo

高校生の時に関心を寄せたエアロゾル・ライティングを、美術の視点から再解釈し、その発祥地であるニューヨークと東京の2拠点で活動する、美術家の大山エンリコイサムさん。独自のモチーフ「クイックターン・ストラクチャー」をベースに壁画や絵画、映像、インスタレーションなどを発表する一方、コム デ ギャルソン、シュウ ウエムラ、アウディ、さらには大相撲の化粧まわしなど、多彩なコラボレーションによって表現の幅を広げています。空間や形式を「横断」することを重要なテーマとする大山さんに、それによって可能になる表現、そして拓かれる未来についてお聞きしました。

「名前をかく」という原初的アクションがもつ意味。

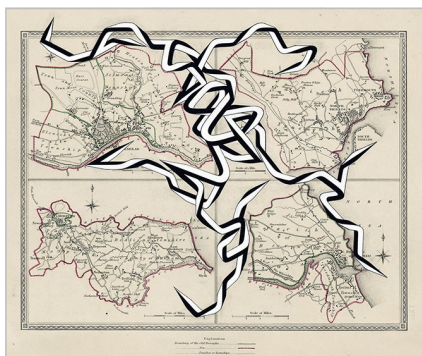
僕の表現のバックグラウンドであるエアロゾル・ライティングは、50 年ほど歴史のある文化で、さまざまなフェーズを経て、今ではグローバルな現象になっています。なので、一概に魅力をお話するのは難しいのですが、僕なりにエッセンスを説明すると、名前をストリートに書いて自己表現する行為と言えるでしょうか。名前は誰もがもっていて、名前をかくという行為も誰もがやることです。小学校に入学したら、自分の持ち物に名前をかくことをまず習うという点でも、原初的なアクションであり、そこには成功・失敗、上手い・下手はない。もっとも手元にある自己表現であり、シンプルだけど力強く、だからこそ拡張性もある。今ではマーケットで人気が出て注目を集めていますが、もともとはニューヨークのティーンエイジャー、それも 10 代前半のキッズたちが始めたことなんです。



エアロゾル・ライティング／aerosol writing

エアロゾル・スプレーでかけられた、ストリートの表現。「グラフィティ(落書き)」という言葉の方が一般的だが、違法行為、迷惑行為という特定のニュアンスが強調され、偏ったネーミングであると大山さんは認識。「エアロゾル・ライティング」あるいは「ライティング」という言葉を使っている。

六本木に新しくできた「POST-FAKE projects」というスペースで開催中の僕の個展「Map Drawings」に紐づけて考えると、エアロゾル・ライティングには「横断する」という特徴もあります。移民の多いニューヨークでは、異なる民族グループが住む複数のエリアを横断して都市を循環するメディアの役割を、地下鉄が果たしています。70～80年代はインターネットは当然なく、移動の手段や範囲も子どもたちには限られていました。そんな中、地下鉄に名前をかくことで、普段の生活圏とは違うところに作品が届き、逆に遠くでかけられたものが自分たちの地域にも届けられるという、ある種のビジュアルコミュニケーションが起こったんです。エアロゾル・ライティングは横断性や匿名性、リモートのコミュニケーションなどの特徴を複合的に備えた表現であり、そうした点は現代美術の文脈から考えても示唆に富んでいます。



Map Drawings

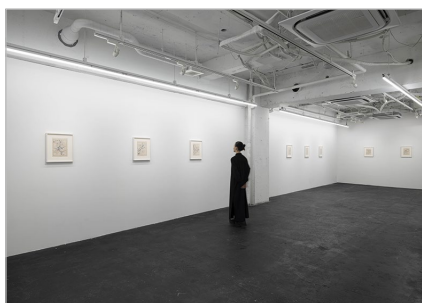
POST-FAKE projectsのこけら落としとなる、大山さんの個展。2022年、POST-FAKEへの出演をきっかけに実現した個展で、「ファウンド・オブジェクト」シリーズ新作12点を展示。古地図にクイックターン・ストラクチャー(QTS)を重ねることで、ニューヨークの地下鉄の路線図と共鳴する。

Enrico Isamu Oyama, FFIGURATI #457, 2023

Acrylic paint on found image

Artwork ©Enrico Isamu Oyama

Photo ©Shu Nakagawa



POST-FAKE

現存のアートやカルチャーを再定義し、新たなムーブメントを創造するメディアプロジェクト。さまざまなアーティストのドキュメンタリー番組をTOKYO MXで放送するほか、YouTubeやInstagram、ウェブマガジンなどで発信。さらに2023年4月7日、六本木にリアルな場であるプロジェクトスペース「POST-FAKE projects」がオープンした。

Photo ©Shu Nakagawa

今回の作品は、古いプリントや写真など既存のイメージの上に、クイックターン・ストラクチャー（QTS）をかき重ねていく「ファウンド・オブジェクト」シリーズの新作で、これまでと違う特徴として古地図を使っています。地下鉄は今話したように、ニューヨークのストリート文化において象徴的なもの。その路線マップの上にドローイングを重ねるのも、ひとつのフォームとして昔から存在しています。今回使用している古地図は、ニューヨークのものではありませんが、複数の地図が1枚の紙に並んでいることに興味を惹かれました。それらの地図を縫い合わせるようにして QTS をかくことで、異なるエリアがコネクトするイメージが頭に浮かんだんです。それには、地下鉄が都市を横断して異なるコミュニティを結びつける、当時のニューヨークのライティングのあり方を映し出してもいます。



クイックターン・ストラクチャー (QTS)

エアロゾル・ライティングから文字としての意味情報や色彩を取り去って抽象化し、再解釈した作家独自のモチーフ。壁やキャンバス、映像、企業とのコラボレーションなど、多様なメディアに展開し、変奏を続けている。

Enrico Isamu Oyama, Choja Machi Mural Project, 2010

Aerosol spray and lacquer paint on concrete wall
14.6m x 23m

Choja-Machi, Nagoya City, Aichi Pref., Japan

Artwork © Enrico Isamu Oyama

Photo ©Takahiro Tsushima

大都会・東京の心象風景と繋がる、自身のモチーフ。

僕の父親は北イタリア出身ですが、僕自身は東京で生まれ、日本の学校教育を受け、一般的な日本人とほぼ変わらない環境で育ちました。ただ、毎年夏になると、家族でイタリアに1カ月滞在することを長い間やってきたので、一般的な日本の子どもの育ち方とは少し違うところもあります。イタリアで過ごす場所が田舎だったこともあり、ある時期から東京は大都会だと強く意識するようになって、コントラストを感じていました。

たとえば、成田空港からリムジンバスで都内に戻ってくる時、成田周辺は緑が多いのですが、都心に近づくにつれてビルが増え、ビルとビルの間を首都高が走り、高い位置を走っていると思っていたらいきなり半地下に潜っていったりする。コンクリートの塊が立体的に交差するイメージが徐々に立ち現れてくるのが、物心がついた頃の心象風景なんです。初めから意識していたわけではないものの、無機質な物体が延長され、立体的に交差する図像性は、QTSにもエコーしている感覚があります。

六本木も首都高の印象が強いですよね。水平方向に首都高が走り、垂直方向に高層ビルが立ち、地下深くを電車が走っている。垂直水平、地上地下とあらゆる方向に階層が複雑に入り組んで、街が形成されている。それが六本木の特徴なのかなと思います。



大山エンリコイサム 美術家
ENRICO ISAMU OYAMA / Artist

published_2023.05.10 / photo_tada / text_ikuko hyodo

東京とニューヨークの " 寛容さ " の違い。

都市では、路地裏やちょっとした隙間など、管理しきれない余剰の空間で、面白いことが起こるとよく言われます。ストリートアートも、そうした空間を活用してきました。でも今はどんどん管理された社会になり、そうした空間は失われ、大きな複合施設に置き換わりつつあります。それによって街に面白みがなくなるという声も聞きますし、実際にそうなのかもしれません。ただ新しくつくられる、より複合的でモール的な大型の空間が、複雑に交差し、連携していく姿も僕としては興味深く、そうしたダイナミズムの中から生まれる新しい都市型のクリエーションもあると思っています。

僕が拠点を置くニューヨークは管理しきれない空間がある一方、法律や警察による取り締まりが厳しく、謝れば許してもらえるような空気はほとんどありません。東京の方がもしかしたらそうした寛容さや、場合によっては見逃してくれる雰囲気はある気がします。ストリートアートも今でこそ市民権を得ているように見えますけど、ニューヨークではそもそも行政と闘ってきた歴史があります。当時のニューヨーク市民にとっては嫌悪の対象でしたし、その記憶を引きずっている人も多いので、両義的なイメージで捉えられている。日本でももちろん、商店街のシャッターの落書きみたいな悪いイメージをもつ人はいるでしょうが、ニューヨークの人たちが抱くトラウマ的な感覚とはちょっと違う。

ストリートアートだけでなく、ブルックリンで若い人たちが運営するオルタナティブスペースなど、一見かなり自由そうなところでも、法的に落ち度がないように行政の許可を細かく得ていたりする。若者が治外法権のようなことをできてしまう可能性は、東京の方が意外とあるかもしれません。

空間を横断することで、現実にはない隙間を創出する。

都市や公共の空間がすみずみまで設計されてしまっている今、そこに文字通りの隙間を見つけることはどんどん難しくなっています。そのため、設計性から逸脱した隙間のような空間を創出するには、既存の様々な空間を横断し、揺さぶることが必要だと考えています。たとえば「ポケモン GO」が一時期ブームでしたが、あの面白さは都市空間をまるごと隙間化したこと。現実の都市に隙間はないのだけど、そこに仮想現実のレイヤーを重ねることで、現実の都市と仮想の都市のあいだに無限に広がるプレイフィールド＝隙間を創出した。アートにおいても、路地裏のような隙間はもうないのだとしても、既存の空間を横断することで、どこにも収まらない表現の領域を仮想的に立ち上げ、目の前の風景を揺さぶってみることはできると思います。

東京という都市は物理的に面積が大きく、水平に広がっています。中心が複数あって、それらがネットワーク状に絡んでいる。時間をかけて滞在することで、だんだん深みがわかってくるような魅力があります。その点、ニューヨークは摩天楼と呼ばれるマンハッタンが中心にあり、ブルックリン、ブロンクス、クイーンズなどはいわゆる郊外なので、一点集中型の都市モデル。都市としての成り立ちがそもそも違うので比較は難しいですが、東京もニューヨークのように、水平だけでなく、垂直の空間にもアートやクリエイションがうまく取り入れられていくといいですよ。

六本木でプロジェクトをするなら、高架下で何かやってみたいですね。高速道路の裏側というか下側の、あれだけ大きなコンクリートの面が、まったく使われずに放置してあるのはもったいない。いくらでも表現やアクティビティを展開する余地があると思うんです。自分だったらまずは絵をかきたい。しかも面としてだけではなく、高架下の空間を横断するようなかたちで、他のエリアに延びたり、拡張したら面白い。そういうイメージが、頭の中で広がりますね。



published_2023.05.10 / photo_tada / text_ikuko hyodo

分断が進む世界で、対話を重ねて横断する。

もし表現の場が、現実の都市から仮想の都市に置き換わったとしても、人間がフィジカルな存在である限り、物理的な空間の重要性は残っていくと思います。80年代にSFが流行った時、人間はやがて脳だけの存在になるんじゃないかというイメージがありましたよね。しかし現実とは違って、物体が省略化されて透明化していくのではなく、どちらかというと中身が入れ替え可能な方向に進化している気がします。

たとえばスマホという器にアプリをインストールするのもそうだし、メガネもかつては基本的にひとり1個だったのが、今はデザイン性が高く価格も抑えられた製品が多く、その日の気分によって替えるようなアクセサリ的な感覚が浸透している。さまざまな着脱性が社会に浸透している気がしますし、それによってフィジカルの意味も少しずつ変わってきているのかもしれない。

僕の表現において「横断」は重要なテーマですが、社会では分断が進んでもいます。横断をするために大事なことは明快で、僕は「対話」だと思っています。国単位でもコミュニティ単位でも、人はみな違って、いろんな意見や価値観をもっている。そのことを前提に、お互いを尊重して対話することで、初めて横断が可能になる。逆に言うと、他人と一緒に住むのが簡単ではないのがいい例ですが、他者同士がお互いに 100%コミットするのはかなり難しい。だけど一時的に場をともにしたり、コラボレーションするための対話だったら、そこまで難しくないだろうし、ある程度なら誰にでもできる。横断や移動も、そういった感覚で臨むのが理想ではないでしょうか。



MEET YOUR ART FAIR 2023「RE:FACTORY」

アートと音楽の領域を横断した大規模なアートフェアで、2023年3月3日から3日間、東京・天王洲で開催された。メインアーティスト／アーティストリック・ディレクターを大山さんが務め、気鋭のアーティスト30名の作品100点以上で構成するエキシビジョン型アートフェアや、現代美術と音楽のスペシャルライブなどを実施。

自分の表現を殺さず、着地点を見極める。

最近はコラボレーションの機会が増えて、表現の軸であるクイックターン・ストラクチャー(QTS)で関係性をつくり、美術以外の領域にも広がっていく楽しさを感じています。幸いにも声をかけていただくことも多く、想定していなかったかたちで QTS の可能性が開けていて、そういう時こそ、対話の必要性を実感します。去年制作した横綱・照ノ富士のための化粧まわしはその一例です。



横綱・照ノ富士の化粧まわし

相撲で力士が土俵入りする際に着用する化粧まわしを、大山さんが横綱・照ノ富士のために制作。2022年1月9日に東京の国技館で行われた大相撲初場所初日にお披露目された。職人、コーディネーターとの連携によって、QTSを初めて刺繍で表現。黒の生地中央にQTSが力強くあしられ、その下には「TERUNOFUJI」の文字が。これまでにない斬新なビジュアルの三つ揃え化粧まわしは、大きな注目を集めた。

Enrico Isamu Oyama, FFIGURATI #351, #350, #352 (left to right), 2022

Silk embroidery

Dimension variable

Artwork ©Enrico Isamu Oyama

Photo ©Shu Nakagawa

大山エンリコイサム 美術家

ENRICO ISAMU OYAMA / Artist



published_2023.05.10 / photo_tada / text_ikuko hyodo

化粧まわしに刺繍で QTS を表現することになったのですが、刺繍の職人は経験と自信があるので、どんな絵柄でも正確に再現できるとのことでした。しかし、ラインの精度は QTS にとって非常に重要で、容易には再現できないはずだというアーティストとしての自負が、僕自身にもありました。そこで手描きの原画をデータ化して、化粧まわしの生地レーザーで QTS のアウトラインを転写し、それを職人に渡して、刺繍してもらうというやり方にしました。結果的に思い通りの仕上がりになりました。

これが僕にとっての対話です。職人に丸投げするわけではなく、かといってまったく信用しないというわけでもない。相撲は伝統を重んじる国技なので、外から見えない決まりごとも多く、それらに抵触しないよう、だけど自分の表現は殺さないよう、着地点を見極めながら進めていく必要がありました。素材との対話、職人との対話、相撲業界との対話を、僕なりの捉え方で実現した好例です。

見境のない横断ではなく、物語としての必然性を。

作品をつくる時は様々な素材を使い、壁画や絵画、パフォーマンス、映像などメディアを横断して表現します。それぞれの素材がもつ特徴をまずは理解して、対話をしながら横断するプロセスは、社会との対話に置き換えても同じかもしれません。捉えようによっては、広く浅く器用にやればいいみたいに聞こえるかもしれないけど、ひとりがこなせる量にも限界があります。アーティストとして扱える素材の数にも限界があるし、ただ手広くやればいいのかではもちろんない。

だから自分にとって意味のある、関係性をつくるべき対象を考えて対話していくことが大事。それは個人のバックグラウンドによって違うと思うんです。僕の場合、場所ですら東京とニューヨーク、そして父の故郷のイタリアは、単なる興味関心を越えたパーソナルな関係性があります。見境なく横断をするのではなく、自分の物語としての必然性を捉えながら、対話を重ねていくことが重要ではないでしょうか。

撮影場所：大山エンリコイサム『Map Drawings』（会場：POST-FAKE projects、会期：2023年4月7日～5月21日）

取材を終えて

一つひとつの質問に、明快かつ論理的に答えてくれた大山さん。「はじめからこういうことを考えていたわけではもちろんなく、20年くらい活動を続け、手を動かす過程で、少しずつ自分の中で言葉が整理されてきたのです」と最後に語ったのが印象的でした。大山さんが大事にしている対話は、自分という内側に向けてまずは徹底して行うからこそ、他者とよりよい形でつながることができるのでしょう。アーティストでありながら、エアロゾル・ライティングの研究者でもあり、キュレーターやディレクター的視点も持ち併せる。肩書きや役割も自由に着脱して、横断していくあり方は、とても現代的に映りました。(text_ikuko hyodo)